

青が島のおカダトカゲ

足田 努 (京大・理・動物)

Notes on the Okada Skink (*Eumeces okadae*)
from Aogashima, Izu Archipelago

TSUTOMU HIKIDA

オカダトカゲは Stejneger (1907) によってニホントカゲ (*E. latiscutatus*) の亜種 *E. latiscutatus okadae* として記載された。その後, Taylor (1936) は彼の *Eumeces* 属のモノグラフの中でオカダトカゲを独立種として扱っている。しかし, オカダトカゲを独立種にするか, 亜種にするかについては異論がある (Okada, 1939; 中村・上野, 1963; Matsui, 1965)。

青が島を除く伊豆諸島の島々, 大島, 利島, 新島式根島, 神津島, 三宅島, 御蔵島及び八丈島のおカダトカゲについては, 昨年すでに, その島ごとの個体群の変異分析の結果を発表した。分類は便宜的に Taylor (1936) に従い, オカダトカゲを独立種として扱うと, 各島の個体群は大きく4つの race にまとめられた (足田, 1975)。

ところが, 青が島産 *Eumeces* は小林 (1955) によれば, 故岡田弥一郎博士により, オカダトカゲではなく, ニホントカゲと同定されている。しかし, 青が島が八丈島のさらに南, 約60kmに位置する孤島であることから, このようなニホントカゲの奇妙な分布には疑いが持たれていた (原, 1976)。

演者は本種の生息の確認のため, 今年4月末—5月始めに, 青が島を訪れ, 標本を採集し, その検討を行った。従来, オカダトカゲの特徴とされてきた形質, すなわち, 成長にともなう体色変化, 後鼻板の形, 胴中央部の体鱗列数について, 他の伊豆諸島産のおカダトカゲとニホントカゲ (京都産) と変異の比較を行ったところ, 青が島産の *Eumeces* はニホントカゲではなく, 八丈島産と同じ race に属するオカダトカゲであることが明らかとなった。

核型からみたテングコウモリ属の系統分類学的位置づけについて

安藤光一 (福大・医・解剖), 内田照章, 毛利孝之
(九大・農・動物)Phylogenetic relationship of *Murina* based on
the karyotypeKŌICHI ANDŌ, TERU AKI UCHIDA, TAKAYUKI
MŌRI

テングコウモリ属 (*Murina*) はヒナコウモリ科 (Vespertilionidae) のテングコウモリ亜科 (Murininae) に位置づけられている。しかしながら, この属の系統分類学的考察は数少ない。演者らは核型及び諸種の系統分類学的形質 (前臼歯, 肩甲骨の烏口突起, 翼構造, 精子の核及び baculum の形態学的相違) から, この属の系統類縁関係について再検討した。日本産 *Murina* 2種 (*M. aurata*, *M. leucogaster*) の核型分析の結果, 2種の染色体数は $2n=44$ であり, 彼等の常染色体には小さな短腕を有する大形ないし中形4対の染色体が認められた (演者らは, これらの常染色体を ST 型のものとみなした)。また2種間には, 明らかな核型の相違が見い出された (*M. aurata* は $FN=60$ であり, 中形1対の SM 型及び小形1対の M・SM 型常染色体を有するが, *M. leucogaster* は $FN=58$ であり, 中形の SM 型常染色体を欠く)。 *Murina* の核型と Vespertilionidae の他の属のものとを比較した場合, *Murina* の核型のあり方は, FN の数値においてかなりの相違を示しながらも, 本質的にホオヒゲコウモリ属 (*Myotis*) のものに類似している。Vespertilionidae の中で最も原始的な属と推定されている *Myotis* との核型の類似性は, 上述した諸形質からの結論と相関する。すなわち, *Murina* は *Myotis* と同様の原始的な形質を保有しており, 決して前進的なコウモリとはいえない。現在, *Murina* は, かなりかけ離れた分類学的位置で *Myotis* (ホオヒゲコウモリ亜科, Vespertilioninae) と区分されているが, *Murina* は系統分類学的に *Myotis* と近い関係にあるものと考えられ, Murininae の設定については, 改めて再吟味する必要があるものとする。